

## 『教えられること 教えられないこと』

明石要一 さくら社

本書のまえがきで著者は問題提起をする。

《「教えられること」と「教えられないこと」を自覚し、その基準をハッキリさせなければならぬのです。》

現職時代を思い出す。こんな基準を意識することなく、評者は学力向上の要請を受けながらも、できる限り体験学習を推進する学校づくりに励んだ。本書を読み、学校教育には「教えられないこと」で大切なことがあるのではないか、という一つの仮説が評者自身の中にあつたのだと自覚できた。

いじめ問題がますます深刻化しているように思われる。著者はいじめとけんかの違いを明確に分けて、けんかという体験を推奨していた。

《いじめとけんかは本質的に異なります。けんかはルールがありますが、いじめにはルールがないのです。だから、いじめは撲滅させなければなりません》

この違いさえ自覚しないで、いじめ指導をしていたのがこれまでの学校の指導だった。こう考えてくるとけんかは、子供にとっては貴重な体験学習になる。しかし、けんかそのものを教えることはできない。あくまでも起きたときにタイミングよく指導する教師の対応に任される。

本書を拝読しながら学力向上一辺倒の学校教育の危うさを思った。本書は教えられない感性、情緒にも配慮した教育活動が求められることを主張する稀本である。